

まんだら通信

第203号 (通巻238号)

平成25年05月 西暦2013年 佛暦2579年 皇紀2673年

安房国八十八ヶ所 第一番札所
295-0103 千葉県南房総市白浜町滝口1084
真言宗智山派 天神山 紫雲寺 高橋 龍渉
郵便振替 00120-2-43163 紫雲寺
TEL0470-38-4740/FAX 0470-30-5040
<http://www.shiunji.org/>
Mail post@shiunji.org



いづもの口へ思ったこと

幕末から明治にかけて、沢山の外人さんがこの国にやってきました。その中のひとりに、英国の女性イザベラ・バードさんがいます。
横浜に着いた四七歳の彼女は、一二五年ほど前の明治十一年(一八七八年)六月、伊藤という通訳兼助手ひとりを連れて、西洋の影響が及んでいない、昔からの日本の姿を自分の目で確かめたいと思い、東京を出発して日光の金谷邸(金谷ホテルの前身)に十日ほど滞在したのち、現在の鬼怒川温泉を経て会津に入り、新潟からは日本海側を北上して、東北地方から北海道のア

イヌの村々まで、三ヶ月かけて旅行しながら、行く先々での出来事を丹念に書き留め、挿し絵を付けて記録しました。
今の川治温泉の上流の集落には、ちょんまげ姿の人がいたという時代です。
朝鮮やシナの、不潔と民度の低さに閉口していた彼女は、東京湾から見た富士山の秀麗さ、打ち続く海岸線の美しさに驚き、上陸してから見た人々の朗らかさ、礼儀正しさや思いやりに感動しながらの旅でしたが、良いことばかりではなく、折から梅雨時ということもあり、雨にたたられてぬかるんだ道を歩き、川止めに遭い、夜ごと襲ってくる蚊や蚤の大量に悩まされという明け暮れだったそうです。
もう一つ悩まされたのは、物見高い人々の目でした。
泊まった旅籠の縁側に上がり込み、障子に穴を空けて覗き、扉に上り、果ては警官の制止を振り切つて、向かいの家の屋根から見下ろす人まで現れるという、盛んな好奇心にはお手上げだったようです。
その中で、子どもを大事にする日本人の姿が、余程印象深かったのか繰り返しそのことを書いています。
「私は、これほど自分の子どもを可愛がる人々を見たことがない。子どもは親に良く従い、自分より幼い子どもに親切である。
子どもの世界では、遊びの決りがあつて、もめ事があれば年かさの者が解決し、大人が立ち入ることがない。
毎日のようにどこかでお祭りがあり、売っている物は殆ど子ども向きのものである。大人は自慢げに、背

負ったり肩車にして祭りに行く。」と。
万葉歌人の山上憶良は「金銀財宝などより、子供という宝の方が遙かにすぐれている。」と歌っていますし、「子宝」、「授かりもの」などともいいます。
奈良時代、既にそつであつたということ、遙か昔の縄文時代のご先祖から受け継がれた考え方だったのでしよう。
このように子供を大切に考える方は、世界中同じと思うのですが、イザベラ・バードさんがしきりに感心するということとは、日本人が特別なかも知れません。
見知らぬ人にも親切、約束は守らない、などという日本人の美徳といわれる心は、代々このように大切に育てられた結果なのかも知れませんね。
ただ：この何年か前から、少し心配なことがあります。こらえ性のない子供や若い人が増えて、勤めに行きたくないという「病氣」になったり、不登校になったり、陰湿ないじめが問題になったりしています。
「子宝、授かり物」を人さまの役に立つ人間に仕立てるのは、親の仕事ですよ。役に立つ立たないは、お金や品物など目に見えるものだけでは、勿論ありません。優しい眼差し、言葉遣いなど、受け取った人が幸せになる人柄ということもあります。
子供から見た親は、人さまが何と言おうと世界一です。その子供は、いつも親の背中を見ています。かわいい我が子に恥ずかしい振舞いは、ゆめゆめしないことです。もう一つ大事なことは、思い通りに行かなくても我慢するときはしなければならぬ、ということ。
そして、人間の中味を濃くする訓練。幼稚園に入る前から、本を読む習慣をつけてあげて下さい。眠る前の一〇分か五分、読んで聞かせるだけで読書好きの子供ができます。私たち夫婦も、そのようにして鍛えられましたから。
(今月号は、ガラにもなくお説教になってしまいました。今後、若者が減って年寄りが増える時代になって、「負担ばかり増えて貧乏くじ」と思うようでは、そのご本人が不幸ですから)

余滴

▼4月29日の昭和天皇のお誕生日に始まって5月3日憲法記念日、4日はみどりの日、5日がこどもの日と、どの日も雨が降らなかつたので、毎朝国旗を掲揚して日暮れになると降納、を繰り返しました。外国に行く、催し物の会場に、各国の旗が揚がっていることがあります。日の丸は、すぐに目に付くだけではなく、意匠も一番美しく、矢張り日本に生まれて良かったと、いつも誇らしく思います。そういえば、外国に行く、とみんな愛国者になるといいますが、分かるような気がします。

▼上の写真はお寺の裏山です。小さくて迫力はありませんが、黄金色に見えるのは、椎の木の若葉と花です。北国の木々はクヌギ、ブナなど落葉樹が多く、萌え上がる春の新芽が素晴らしいのですが、暖地のこの辺りは一年中メリハリがないように見えます。
でもこの季節だけは、風にまで新緑の匂いがある見惚れてしまいます。▼今月のオープンテンプルは、第3日曜日の5月19日です。お待ちしております。
▼お手紙、葉書、電話、道で会って色々ですが、まんだら通信の

ご感想を戴きます。褒められてばかりでは何だかなあ、と贅沢を言っていました。先月号を読んだ方から、右翼っぽいという批判のメールを戴きました。どんなことでも、率直に聞かせて戴きたいと思えます。▼今月の野草はナガミヒナゲシ(長い実の雛芥子)。ご覧のようにケシの仲間です。50年ほど前、世田谷区で見付かったのが初めてという、ホヤホヤの帰化植物です。私はこの辺りでは10年ほど前に見つけましたが館山ではもう少し前から見付かっていたそうです。2013.5.9 龍渉



第八十八話 モノサシ

いやあ、それにしても、今年は春が早かったですねえ。

早かったと言えば、ダルビッシュの球の速いこと速いこと。大リーグ、今季初登板の試合でいきなり九回ツーアウトまで完全試合でしたからね。

もう、彼の場合は、日本の野球のモノサシでは計れない、スケールの大きさを感じますね。もともと、モノサシのことを英語でメジャーと言いますけどね。

今日は、原発事故による放射能の除染が急がれる福島から、あるお医者さんの話をいたしましょう。

二〇一一年三月十一日の大震災のあと、福島原発は翌十二日から立て続けに水素爆発を起こしたことは、まだ忘れられてはいないでしょう。原子力発電所が爆発するーそんな、誰もが考えたことがない事故が現実になったのです。

原発の近所の町や村の住民の皆さんは、どれだけ恐ろしかったことでしょうか。

今日の主人公、高橋亨平先生の医院は、福島原発から半径二十五キロ圏内の南相馬市にあります。福島市はバスをチャーターし、近隣に住む住民たちを次々と近所に避難させはじめました。

しかし、亨平先生は、「患者さんが来るかもしれないから」と看護師や病院のスタッフをまず避難させ、ひとりご自分の医院に残りました。「患者さんを捨てて、医者が先に避難してはならない」と心に強く誓ったのです。

もちろん、いつも診察を受けにくる患者さんたちも避難していますから、誰も医院にはやってきません。それどころか、一日、二日と経つうちに、トラックなどの物

流が途絶え、食料はもちろんのこと、満足に薬の補給すらできず、医院の存続もままならず、震災後十日ほどで、亨平先生もいったん避難することにしました。しかし、先生はなんだか落ち着きません。医師である自分を必要としている人がどこかに必ずいるはずだと思いついて、テレビを見て、驚きました。なんと、画面には、自分が無理やり避難させた医院の看護師やスタッフたちが、別の施設でボランティアとして必死に働いている姿が映っているではありませんか。

先生は居ても立ってもいられず、すぐに自分の医院を再開することにしました。「亨平先生が医院に戻ったぞ！」噂を聞いた看護師やスタッフが笑顔で集まってきました。

「先生は、絶対に戻って来ると思った」と誰かが言うと、大きな笑いが起こりました。

病院再開のニュースが広まると、次々と患者さんが訪れました。先生は、専門は産科と婦人科でしたが、専門外だからと言って断った患者さんはひとりもいません。

そのうち、健康な人たちが次々とやってきました。

「先生、この病院を物流の拠点にしてもいいかなあ。いつも確実に誰かがいてくれる場所がないもんで」「ああ、もちろん、空いている部屋を自由に使って」

カップめん、水、パン、レトルト食品といった食料だけでなく、全国各地から送られてきた衣類まで、病院に運び込まれました。亨平先生は、一生懸命でした。医療活動以外のそつしたボランティアだけでなく、「ガスの供給が止まる」と聞けば、東京・霞が関の経済産業省まで直接電話を入れ、地元民の代表として、交渉したので

す。

原発事故から二カ月が過ぎた時、先生は自分の身体の異変に気づきました。下血

が激しかったからです。先生は福島市内の大きな病院で検査を受けました。すると、なんと大腸がんの末期で、余命五カ月と宣告されてしまったのです。

それでも、先生は医院を体むことはありませんでした。自分が末期がんに侵されていることを誰にも告げることなく、毎日毎日、診療に追われていました。先生は、人生最後のミッション（役目）として、ここでいつ死んでもいいと自分で決めて挑戦してきたと言っています。そして、その言葉通り、原発事故以後、南相馬市で唯一お産のできる医療機関として、八十人の赤ちゃんの誕生に立ち会ったと言います。その頃、先生はご自身のホームページに、生まれたばかりの子供たちに向けて、こんな書き込みをしています。

「君達のお陰で、我々も生きる希望が持てた。君達が遅く成長していく姿を何時までも見て行きたいが、私にはもうそんな時間は残されていない。堂々と誇りを持って、生きていってくれる事を心から願ってやまない。頑張れ！」（二部抜粋）

しかし、さすがの先生も、やがて起きることができなくなり、入院し、しばらくして、家族や仲間たちに見守られながら、息を引き取りました。

亡くなってから数日後、先生のノートが見つかりました。

そこには、亨平先生が「自分でこれやらなければならぬこと」が書かれていました。「やりたいこと」ではなく、「やらなければならないこと」としっかりと宣言されていました。

「やりたい、どんなことをするつもりだったのだろう。そう思ったご家族は、次のページをそっとめくりました。そこには、先生の強い筆跡で、こんなことが書かれていました。

「自分がこれからやるべきことこの福島に放射線医学研究所を設置すること・原発に代わる自然エネルギーの開発と実践・バイオテクノロジーの研究・農地の除染に関する研究・汚染された地面を使わない水耕栽培の研究・沿岸での養殖漁業の研究・原発内で活躍するロボット工学」

医師である先生が、たったひとりです。それだけのことをやるうとしていたのです。そのどれもが、原発の事故によって壊滅的な打撃を受けた「故郷」を救うための研究です。国は、県や市は、原子力委員会は、そして東京電力は、いったい何をしているのでしょうか。

そう言えば、生前の先生の口癖は、こうだったそうです。

「行動の伴わない学問は意味がない」そして、家族がノートの最終ページをめくりました。そこには、先生の字で、家族宛てに、こんな言葉が残されていました。

「もとの幸せに戻りたいというモノサシを持ってまます不幸になるなら、別のモノサシで、幸せの測り方を換えてごらん」

今月号も、MOKU出版さんと三遊亭鳳亭のご好意で、転載させていただきました。